



認定NPO法人アジア教育友好協会理事長
谷川 洋氏に聞く
①

潮流

潮流◆題字奥野誠亮

交流で育つ 日本の子どもたち

「学校をつくってあげる」ではなく
建設する人を応援する態度から
交流する日本の子どもたちも育つ。
生命力あふれる現地の子どもは
戦後間もない日本の姿を思い出させる。

ワンコインスクール運動

——日本の学校の子どもたちに働き掛けていることは何ですか。

最近、ワンコインスクールという活動を始めています。これは、ワンコイン（500円）でも1万人の人が協力すれば、現地では立派な学校が建設できますと働き掛けるプロジェクトです。このとき、日本の子どもたちには「学校

をつくるから、お小遣いがほしい」と親に訴えるのではなく、自分たちで稼ぐことを課題にしました。学校のイチヨウの木から銀杏を集めてバザーで売ったりとか、空き缶集めをしたりと、やり方はいろいろあります。東京のある学校では、何かいいことを実行したら、自分へのご褒美として親から10円を出してもらい、それをためて、頑張りカードに記録していくという活動が始まりました。例えば、本を1冊読んだとか、小さい子どもの面倒を見たとか、下級生であれば、ジュースを飲むのを1回我慢したなど、何でもいいのです。そうして頑張ったことを50回やれば、500円がたまるというものです。この運動を始めた小学校では、高学年の児童を「ラオス親善大使」に任命して、子どもたちのリーダーとしてこうした運動を校内で広めました。下級生との交流で異年齢同士のつながりが深まったり、「そんな程度のことでも10円はもったいない」などと、親子の対話が深まるなどの効果があったといえます。

——子どもにとって、他にメリットになったことは。

この運動をした学校では、子どもたちも「自分たちが応援してできた学校」という意識を持ちます。「僕にもできた」という

達成感や自己肯定感も持てます。親にとっても、自分は何もしないで、子どもには「我慢をしろ」「本を読め」と言っても説得力はありませんから、この運動を通して、親子で我慢したり、何かをしたりして絆が強まったこともあったようです。交流の副次効果と言ってよいかも知れませんが、思わぬ効果が出ているようです。

——どれぐらいの学校が交流に参加していますか。

現在は、全国で延べ73校が、この交流運動に参加しています。今年中にはさらに増えそうです。ただ、やはり核になってくれる先生がいることが重要です。私たちも年に1回、10月にこうした取り組みを行っている学校の先生方に東京に集まっていたいて、フォーラム形式で実例の発表をするなど、意見交換や交流をしています。

このような現地の学校との交流に参加してくれる学校を探すのに苦労していますが、行政も私たちの取り組みを評価してくれており、例えば東京都では、毎年5校ずつ、交流校を紹介してくれるようになりました。このような国際交流が、子どもたちにとって教育的にも意義があると認めていただいたわけです。

——学校以外にも動きがありますか。

福島県の飯館村では、ふるさと納税の財源を使って、自治体としてラオスの学校づくりと村同士の交流を始めようという動きがあります。実際に教育長なども現地に行ったりして、本気になって交流をしようということになっていきます。

運動場が祭りの場に

——現地交流の様子を教えてください。

2年前に、横浜市の子どもの先生とラオスに行った時、現地の子どもの先生とラオスに教える機会がありました。騎馬戦や二人三脚を教えました。言葉は必要なくて、すぐに覚えて楽しんでくれました。また、夕イの山奥の学校に、綱引きの綱を持って行ったこともあり。現地の子どもの先生は集団で運動するという機会はほとんどないのですが、綱引きにはすぐに夢中になりました。この時は、実は、安倍(晋三)元首相も参加していただいて、一緒に綱引きをしています。日本の学校では当たり前のように運動場がありますが、現地ではないところも少なくありません。ですから、私たちが学校を建設するときは、運動場になる平らな場所を用意してもらうことを条件にしています。

開校式の時は、この広場を使ってお祭り

になります。整地をしていると、戦争時の爆撃の跡や葉きようが出てくることもあります。撤去することもあります。昔、ここで戦争があったことを学ぶ記念として、安全な処理をして残している所もあります。

——子ども同士はどのようにして交流しているのですか。

子ども同士の交流では、絵手紙などが中心になります。現地の子どもの先生には初めて絵手紙を描く子どももいます。でも、子ども同士は絵を通して、互いに思いが胸にストンと落ちるようです。また現地では、学校ができた後も学校菜園を造り、できた作物を売って学用品を買うなど、少しでも自立していけるように働き掛けています。そのようなキャッシュクローブ(現金になる作物)があることで、学校運営だけでなく村も自立していけるわけです。

——日本から参加した現場の先生たちは、現地の学校の様子をどう見えていますか。

日本の学校の先生にも現地に行ってみてもらったことがあります。山奥の学校ですが、視察した先生たちはみんなうらやまがるのです。それは、現地の子どもの先生の視線が、先生の持つチョークに集中しており、真剣に勉強する姿勢をひしひしと感じるからだそうです。現地の熱血先生が子ども

もたちの生活全てを指導している姿にも、かつての日本の教師の姿を思い出すようです。知識だけを教えるのではなく、生きる力とか生活力そのものを育てていく姿を見て、元気をもらおうようです。

今の日本の学校では、親が口を出すばかりで、手を動かさないように感じます。例えば給食費を払わない親に、担任の先生が集金に行くという現状があるようですが、言語道断と思いますね。むしろ、親の代表としてPTAの会長や自治会長が集金に行くべきではないか、と。一番大変な仕事は先生にやらせるのではなく、当事者の組織のトップがやるべきだと思いますね。

——日本の学校現場や教育委員会に注文したいことは。

よく2、3年で校長が変わると、こうした交流活動が続かなくなったりします。学校がその地域から信頼されて、学校運営を地域と連携して軌道に乗せていくには、最低でも5年くらいは同じ学校に在るべきではないでしょうか。

高齢者の「応援隊」も

——これからの活動でやってみたいことは何ですか。

日本の高齢者による「応援隊」をつくり

たいということ。高齢者はお金も暇もありません。その人たちに本気になってもらって、「この学校は私が担当する」と決意を持って、普通の観光旅行ではまづ行けない現地に行ってもらい、その様子を日本の



現地の村人が一緒になって学校建設をする様子

子どもたちに伝える役目を果たしてもらえればと考えているところです。実は、高齢者が子どもだった頃、特に戦後間もない頃などは、バラックの建物で授業をしたりしていました。今の学校より、アジアの山奥

の手作りの学校に近かったとも言えます。日本の子どもたちにも、昔の日本の学校はこんなだったけれど、おじいさんやおばあさんが頑張って働いて、今のような学校ができるようになったんだよ、と話していきたいわけです。

アジアの貧しい村で生命力あふれる子どもたちとの交流を通して、日本の伝統精神の衰えと青少年の生命力・精神力の衰えを痛感しています。学校建設と交流事業を通して、実は日本の子どもたちこそ本当の受益者ではとの思いを深めました。

——日本の学校の先生方に協力してほしいことは。

日本の子どもたちに話をするときに役立つ、ちょっとした教材のようなものができないかな、と考えています。例えば、現地の小学校の子どもが隣のお兄ちゃんや山に行ったら、そのお兄ちゃんが爆弾を踏んで亡くなってしまった。その子どもをどう励ましたか—などを話にまとめたいと思っています。現地での学校建設のエピソードなども含めて、日本の子どもたちの参考になるものを、先生方の力もお借りして、つくってみたいと考えています。

アジア教育友好協会 || [http://www.hjppn-](http://www.hjppn-aefa.org/)

[aefa.org/](http://www.hjppn-aefa.org/)